

名古屋大学留学生センター地域貢献特別支援事業

小中学校教員・日本語ボランティア研修会

「日本語を母語としない子どもの日本語教育を考える」

浮 葉 正 親

はじめに

愛知県をはじめとする東海地域は、日本語を第二言語として学ぶ、いわゆる「日本語指導を必要とする外国籍児童生徒」が全国でもっとも多い地域である。小中学校教員だけでなく、地域のボランティアも日本語教育に積極的に関与している。しかし、両者の連携のあり方や具体的な方法についてはまだ手探りの段階にあり、そもそも外国籍児童生徒が必要とする日本語の力とはどのようなものであり、彼らにどのような支援が必要なのか、という根本的な問題に対する理解を共有することが必要ではないかと思われる。

そこで、この研修会では、年少者の日本語教育に数多くの提言をしてこられた川上郁雄氏（早稲田大学大学院日本語教育研究科教授）を講師に迎え、第二言語として日本語を学ぶ子どもたちの言語能力を測る尺度である「JSLバンドスケール」を使った調査と実践について講演していただき、岡田安代氏（愛知教育大学教授）にもコメントを加えていただいた。

なお、この事業は総長裁量経費（地域貢献特別支援事業）の支援を得て実施された。

【参加者】

平成19年3月10日、名古屋国際センター別棟ホールで、小中学校教員・日本語ボランティア研修会「日本語を母語としない子どもの日本語教育を考える」を開催した。参加者は、小中学校教員21名、日本語ボランティア53名、その他（日本語ボランティア希望者、大学教員、大学院生等）17名、これに主催者側のスタッフ8名を加えて、計99名である。川上郁雄氏の講演『「移動する子どもたち」の言語教育をどう支えるか—JSLバンドスケールを使った調査と実践』に続き、岡田安代氏（愛知教育大学教授）のコメントがあり、参加者

との質疑応答が行われた。（案内チラシ参照）

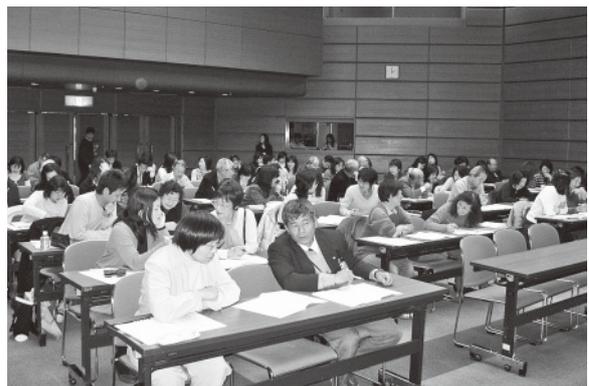
【講演】『「移動する子どもたち」の言語教育をどう支えるか—JSLバンドスケールを使った調査と実践』(川上郁雄・早稲田大学大学院教授)

(要旨)

今日は、まず、第二言語として日本語を学ぶ、JSL (Japanese as Second Language) の子どもたちの現状をお話し、その課題を明らかにします。次に、学校とボランティアと行政の関係、さらに大学の役割についてお話し、最後に、それらのよりよい関係性を構築するための提言をしたいと思います。

それでは、まず、「JSLバンドスケール」とは何かを知っていただくために、ビデオを使います。このビデオは、神奈川県の実川高校で撮影されたものです。JSLバンドスケールとは、JSLの子どもたちの言語能力を測る尺度（ものさしの束）ですが、言語能力の判定が目的ではなく、それに基づいて、子どもたちに必要な言語能力とは何かを議論するための出発点になるものです。

JSLバンドスケールはオーストラリアのESL (English as Second Language) バンドスケールを下敷きにして考案されたものです。その根底にある問題



意識は、多言語環境下にある子どもの言語習得にはどのような特徴があり、どのような困難があるのかというものです。子どもの言語能力を測るとき、例えば、ひらがなが書けるかとか、漢字が読めるかなど、どうしても「読み書き」を中心にした国語教育の視点で考えてしまいがちです。ところが、家庭や学校で複数の言語に接する子どもたちの言語習得の過程を捉えるには、言語と認知発達上の諸特徴や教育歴、母語の影響なども視野に入れなくてはなりません。JSLバンドスケールの根底にある言語観は、ことばが語彙や文法といった構造的知識と社会言語学的な語用論的知識からなる「言語知識」だけでなく、話題の知識や過去の感情的な経験からなる「メタ認知的方略」によって支えられているというものです。ことばを操る能力とは、選択された意味の結合体であるテキストを読み解く力であるという言語観なのです。これは第二言語の習得と母語力や母語の経験が相関するというカミンズ (J. Cummins) の「二言語相互依存の仮説」とも関連します。

子どもたちの日本語能力の発達段階を知るために、小学校低学年の「話す」力のレベル1から7まで具体的に抜き出してみましょう。レベル1は「日本語に初めて触れる」段階、レベル2は「日常生活でよく使う決まった日本語表現を理解し始め、身近な環境で日本語を話すことを試み始める」段階です。以下、「学校生活やクラス内で使われる日本語に慣れ、日本語を学習し始める」段階 (レベル3)、「習った日本語を試そうとしたり、自分がじかに触れる社会環境を超える範囲で日本語を使用しようとしたりする」段階 (レベル4)、「広い社会的文脈で日本語を使用する力が定着してきている。しかし、学習上の複雑な内容を表現する力は限られている」段階 (レベル5)、「ほとんどの社会的文脈で十分に日本語を使えるようになる。学習上の文脈でも十分に日本語を使えるが、部分的な欠如もある」段階 (レベル6)、「すべての社会的文脈、学習上の文脈で十分に日本語を使用できる」段階 (レベル7) の順です。皆さんはこのうち、「日本語指導が必要な子ども」はどのレベルまでの子どもだと思いますか。実は、もっとも高いレベル7でもまだ支援が必要です。このようなレベル判定は、判定することに意味があるのではなく、どのレベルにどのような支援が必要であり、どのような補助があれば何ができるのかを知ることが重要なのです。



そこで、スキヤフォールディング (Scaffolding) という考え方が参考になります。これはギボンズ (P. Gibbons) が指摘していることですが、スキヤフォールディングとは家を建てるときに使う足場のことであり、家が完成するとはずすものです。つまり、自分のできるようになるまで支えてあげることです。支援をしていると、どうしてもすぐ教えてしまいがちです。ところが、その子どもが次に同じ問題に遭遇したときにひとりで解決できるかということ、それはまた違う目で見ないと分かりません。ヘルプ (Help) がスモールステップですべて準備してあげるのに対し、スキヤフォールディングはその場面で必要な力を育てていくことを重視します。自転車に乗れない子を後ろで支えてあげ、少し乗れるようになると徐々に手を離していくのと同じだと考えれば分かりやすいでしょうか。私たちはどうしても目の前の子どもに「日本語を入れること」だけに集中しがちです。取り出し指導で一对一で指導するときにはそれでいいかもしれませんが、在籍クラスでの授業にも学びがあります。ですから、担任の先生もこのことを踏まえて指導してもらわなければなりません。また、ボランティアにも、在籍クラスで何が必要であり、その子が必要な力とは何なのかを、担任の先生と一緒に考えていくことがもとめられるのではないのでしょうか。

最後に、早稲田大学が2002年度から新宿区の教育委員会と協定を結んで、大学院生をボランティアとして学校に派遣している事業について紹介します。これを私は「早稲田モデル」と呼んでいるのですが、日本語教育の実践教育として、大学院教育に位置づけています。学生たちは現場に行き実践をし、その経験を持ち帰って議論をします。それを繰り返すうちに学生たちは変化・成長していきます。したがって、このシステムは単なる派遣システムではなく、支援システムでも

あると同時に日本語教員養成システムでもあるのです。新宿区の大久保小学校、西早稲田中学校に続き、2006年度から先ほどビデオで紹介した神奈川県立愛川高校や目黒区でも、大学院生たちがJSLバンドスケールを使った調査と実践を行っています。このモデルの中心的な課題は、子どもにとって必要な日本語の力と何なのか、それをどうやって把握し、伸ばしていくのか、ということを学校や行政と一緒に考えていくことであり、JSLバンドスケールはそのための「共通の言語」だと考えているのです。

もう10年以上前から、さまざまな場所で連携が必要だということが盛んに言われています。私が関わってきた経験では、人と人をどう繋ぐか、ネットワークの構築というようなことが議論されます。では、ある団体と別の団体が結びつければ、また行政に予算がつけば、子どもたちの教育が良くなるのかというと、問題はそう簡単ではないと思います。子どもにとって必要な日本語の力が何なのかを考えるためには、何よりもまず子どもを見ないとだめです。しかし、担任の先生も忙しい、だから日本語の先生に任せている、行政は行政で予算をつけることだけに熱心で、加配の先生を送ればいいと考えている、というような状況がありがちなのではないかと思われます。子どもたちの日本語の力を伸ばすには何が必要で、それをどうやって伸ばしていくのか、そのために教師やボランティアは何ができて、行政はなにができるのか、それを議論し続けていくことが大切なのです。先ほど紹介した「早稲田モデル」やJSLバンドスケールを使った調査と実践の意義を皆さんもそのような視点で捉えなおしていただければ幸いです。

【コメント】岡田安代氏（愛知教育大学教授）

愛知教育大学では、2005年度現代GPに「外国人児童生徒のための教材開発と学習支援」が採択され、小中学校への学生派遣や教材開発を行っています。刈谷市、知立市、豊田市という3市の教育委員会と協定を結び、教育委員会が各学校のニーズを吸い上げて大学側に協力を要請するという形になっています。派遣する学生は当初は日本語教育コースの学生が中心だったのですが、他の専攻の学生にも広がっております。教材開発については、算数の文章題を手始めに教科書のリライト教材を開発しております。学生派遣や教材開発の中心になっているのは「リソースルーム」でし

て、大学院生が詰めておりますので、ご連絡いただければ皆さんからのご相談に対応できると思います。

【質疑応答】

Q. バンドスケールのレベル判定についてですが、複数の支援者による共通理解はどのように成立するのですか。

(川上) バンドスケールのレベル判定は主観的な判断です。複数の支援者がそれぞれの主観的な判断を出し合い、突き合えましょう、そうやって子どもの力の立体的な把握をしていきましょう、と言っているのです。子どもの力というのは多面的、動的で変わりいくものなんですね。場面によっても変わりますので、それを客観的に捉えるのは非常に難しいと思います。そのことよりも、支援者がその子どもとの関係性のなかで私にはこう見えただとか、こういう支援をするとどういった効果があったのか、という情報が非常に大切です。その情報を持ち寄ってその子どもに対する指導の仕方を話し合い、理解することが大切です。つまり、子どもの言語能力の協同的把握から協同的支援につなげる道筋をつけるのがバンドスケールの役割なのです。バンドスケールが「共通の言語」だと申し上げたのはそういう意味ですし、このことは教員の資質向上にもつながります。

Q. 「メタ認知的能力」という用語についてもう少し詳しく説明していただけますか。

(川上) メタ認知とは、ものを判断するときに、今まで経験したことがあるものを踏まえてあることを理解することをいいます。メタ言語能力というものもあり、言語を例えば子どもが日本語を初めて見たときに、「これが文字だな」と判断できれば、ある意味でメタ言語能力があるということになります。大人が新聞を見ていると、自分は新聞を読めなくてもそれは読むものなんだということが分かる、それがメタ認知的な能力です。もし、その子が母語で教育を受けていれば、メタ認知的、メタ言語的な能力が育成されているんですね。教室に入ったとき壁に貼ってある紙（時間割表など）が何なのか、たとえ日本語が読めなくても分かるわけです。これらの能力の育成も言語能力を高めていくために必要なものであり、ただ言葉を注入することだけに集中するのは問題です。それらの能力を視野に入れた教育支援が必要だということを申し上げたかったのです。

Q. バンドスケールによる実践においても、子どもと子どもとの関係作りが重要だと思いますが、川上先生の考えをお聞かせください。

(川上) ご指摘の通りだと思います。子どもは周りの子どもたちとのやりとりのなかで言語能力を伸ばしていきます。ですから、取り出し教育で日本語を支援者から学ぶだけでなく、在籍クラスでの担任や他の子どもたちとのやりとりのなかで学ぶことが重要になります。今日のキーワードの一つが「多文化共生」ですが、JSL の子どもに日本語を教えるだけでなく、その子と周りのいる子どもたちとを一緒に教育していくのが多文化共生教育なのです。

【アンケートの結果から】

参加者：91名（主催者側8名を除く）

- ・小中学校教員：21名
- ・日本語ボランティア現職者：53名
- ・その他（日本語ボランティア希望者、大学教員、大学院生等）：17名

アンケート回答者：54人（回収率59%）

(1) 研修会の内容は期待に沿うものでしたか。

- ・期待以上で、とても満足した。：18名（33%）
- ・期待通りで、まあまあ満足した。：28名（52%）
- ・やや期待はずれだった。：5名（9%）
- ・まったく期待はずれだった。：0名

（無回答：3名）

(2) 今後、どのようなテーマの研修会をご希望ですか。

- 学校、教員、日本語教師、ボランティア、行政、教育委員会、それぞれがそれぞれの立場で、うまく連携できるように、提案してもらえる研修会（このような会に行政、教育委員会関係者があまり参加しないので）。
- JSL の子ども達の支援をしたいと思っています。スキルアップのための研修会があると嬉しいです。
- JSL バンドスケールについてもっと詳しく（実際のものを見てなど）教えていただける研修会を希望します。
- 外国人児童生徒を担当する教員の支援について（日本語教育の経験がない教員に対する支援など）。
- 外国籍の子ども達の教育問題、現状の報告が知りたいと思います。

○ボランティアとして学校にどう関わっていくかについて

○ボランティアと教員との関係

○ボランティアとして子ども達にできること、やるべきことはなんでしょうか。私は地域の日本語教室で子どもクラス（基礎レベル）を支援しています。学校でどのような活動をしているのか、どのような状況であるのかなどはまったく分かりません。そんなわたしにできることはいったい何なのでしょう。

○外国人児童生徒に対して、具体的な実践や教材についてもっと詳しく知りたいと思います。また、児童の言語、文化と日本語、文化について、児童の文化を保護しながらどのように日本に適応させていくか、ということをもっとくわしく知りたいと思っています。

○「言語を学びとる+言語を教える」という双方向のテーマを希望します。日本語を習得させるのではなく、日本語を話す側も相手の言語について関心を持ち学ぶ姿勢も必要かなと感じました。

○実際に現場で体験したことなどを詳しく聞いてみたいです。

○具体的な教材に対して、外国人児童の教材について、もっとくわしく。

○外国人に日本語を教えていく時に問題となる敬語、日本語の発音、その他実際のテーマにそって、教え方等の研修会にしてほしい。

(3) この研修会に関するご意見、ご感想をご自由にお書き下さい。

○バンドスケールは非常に主観的なものだから、いろいろ付け合せが必要ということ、「ことばの力」をつけさせることが大切だということが聞いてよかった。

○貴重な機会だと思います。年に1回ではなく、2回、3回と増えていくことを望みます。

○指導にあたっての心構え、ポリシーを押さえていただいたので、とても参考になりました。

○カリキュラムに頼ったら、人間（子ども達）を見なくなる、という川上先生の言葉の大切さがよく分かりました。今後子ども達との接し方の基本とさせて頂きます。

○子どもに目を向ける、全人格的に対峙する、という教育の根本的なことを改めて考え直すきっかけとなりました。

- 「子どもが必要としていることを支援」からはずれないように、教材作りが目的にならないように、大切です。
- 外国人生徒の言語能力を引き出し、外国人生徒の力や能力をサポート、支援するという説明のときの川上先生の力説ぶりは、とても力がこもっていました。
- 子ども達が移動する場合、各自のJSLバンドスケールの結果を持って移動するようになれば、新しい学びの場でも把握しやすく、継続した学習をする目安になると思います。学校教育の場面で、このバンドスケールが一般的に使用されていくことを望みます。
- 隣の席の方と情報交換ができたのも良かったです。話し合う時間を取り入れて下さって、嬉しかったです。
- 講師の先生、参加者との意見交換がとても参考になった。
- JSL生徒の現状をいままで知らなかったのも、とても参考になりました。
- バンドスケールについて初めて知ったので、とても興味深かったです。ボランティア教室でも利用可能だと思うので、参考にしたいと思います。
- 川上先生がおっしゃられたバンドスケールが広がっていくことも大切ですが、それ以前に、外国籍の児童の幅広い面での（学校で担当になった教師だけにとどまらず）支援と理解が必要だと思います。
- 川上先生の見方、考え方を実践したいと思います。それと同時に、教える内容やカリキュラム化も必要で、川上先生の考え方を入れ、何が大切かを伝え合い、話し合っていこうと思います。主催者側は、こうした内容を一般、行政にぜひ伝えていただきたいと思っています。
- 外国人の労働者についてのニュースが増えていきます。児童・生徒やその親という家族単位でフォローしていくことが必要かもしれません。外国人は「問題を起こしている」と見られがちです。問題に至る背景を日本人が知ることからスタートしてはどうかだと思います。生活に必要な知識の提供など、総合的なフォローが日本に暮らす人々（日本人も海外からの人も）の生活を向上させると思います。日本語の教育もその一環でしょうか。私も実践できたらと思います。
- もう少し具体的な説明が聞きたかったです（とくに

JSLバンドスケールについて)。

- 専門教員の養成、国、行政が責任を持って、今、日本で学童期を過ごすことになった子ども達に教育すべきということはずっと思っていたので、今日のお話で本当に同感でき、よかったです。ある一人の子どもに関わる関係者がどこで支援しようとも、ともにその子をどう見ているか、共通認識を持つ手立てはぜひ必要だと思いました。

【今後の課題】

留学生センター、(財)愛知県国際交流協会、(財)名古屋国際センター、東海日本語ネットワーク、四者の連携事業は今年度が5回目となる。回を重ねるたびに参加者も増え、過去3年は100人前後の参加者を得ており、この研修会に対する期待の大きさがうかがえる。地域の日本語ボランティア、小中学校教員や語学相談員等の関係者が同席しての研修会は、多様な情報を得る貴重な機会となっている。

今回の研修会では、21名の小中学校教員の参加を得たのが成果である。しかし、外国人児童生徒をめぐる諸問題の解決には、現場の加配教員や語学相談員の努力だけでなく、周りの教員のバックアップが不可欠である。この研修会に出てこないような学校関係者にどうやって関心を持たせるか、という点が今後の課題としてあげられる。また、地域の日本語ボランティアと学校との関係についても、今回の研修会でも、問題提起はされたものの、両者の意見交換が十分になされたとはいえず、さらに議論を深める必要がある。そして、講師の川上教授が推進する「早稲田モデル」のような、大学の取り組みについても、この地域でも議論しなければならぬだろう。愛知教育大学の岡田教授のコメントによれば、近隣の市町村からの学生派遣の要請は増え続けているものの、そのシステムを運営していくには困難（例えば、学生の交通費をどこから捻出するのか等）も少なくないようである。

過去数年間、四団体による共催事業を継続してきて感じるもっとも大きな課題は、この研修会の成果をどうやって行政に反映させられるか、という問題である。研修会に行政の担当者が同席できるよう、新たな施策を提言していくための努力がもためられるだろう。四者の連携をさらに意味あるものにしていくためにも、今後は、行政へのアピールを意識した活動を模索していきたい。

平成 18 年度
名古屋大学留学生センター地域貢献特別事業

小中学校教員・日本語ボランティア研修会 「日本語を母語としない子どもの日本語教育を考える」

愛知県をはじめとする東海地域は、「日本語指導が必要な外国人児童生徒」が全国でもっとも多い地域です。今回の講演会では、年少者の日本語教育に数多くの提言をされている川上郁雄先生（早稲田大学大学院日本語教育研究科教授）をお迎えし、早稲田大学が教育委員会や学校と連携して取り組んでいる新宿区での実践とJSLバンドスケールを使った調査について紹介していただきます。

- 【主催】名古屋大学留学生センター、愛知県国際交流協会、
名古屋国際センター、東海日本語ネットワーク
- 【後援】愛知県教育委員会、名古屋市教育委員会
- 【日時】平成 19 年 3 月 10 日（土）13:20—16:30（12:45 受付開始）
- 【場所】名古屋国際センター 別棟ホール
名古屋市中村区那古野 1 丁目 47 番 1 号 TEL:052-581-5689
地下鉄桜通線「国際センター」駅すぐ
ホールへの出入り口は地上のみですので、地下からお越しの方はビル 1 階の北側
出口からホールへお入りください。
- 【日程】 12:45 受付開始
13:20 開会挨拶
13:30 講演「移動する子どもたち」の言語教育をどう支えるか
—JSL バンドスケールを使った調査と実践—
講師：川上郁雄氏
（早稲田大学大学院日本語教育研究科教授）
15:00 休憩
15:20 コメント：岡田安代氏（愛知教育大学教授）、質疑応答
16:30 閉会
- 【対象】小中学校教員、日本語ボランティア現職者
- 【参加費】無料

【申込み方法】

- 1) 別紙申込み用紙をファックスまたは郵送で。
- 2) E-mail による申込み

【申込み締切り】平成 19 年 2 月 23 日（金）

◆申込み・問合せ先◆

名古屋大学留学生センター 浮葉正親
〒464-8601 名古屋市千種区不老町
Tel: 052-789-5771 Fax: 052-789-5100
E-mail: j46084a@nucc.cc.nagoya-u.ac.jp